

源氏物語の和歌：霞・霧・雲の心象

中島, あや子
鹿児島大学法文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/11933>

出版情報：語文研究. 66/67, pp.62-70, 1989-06-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



源氏物語の和歌

——霞・霧・雲の心象——

中 島 あや子

枕草子の「霞も霧もへだてぬ空のけしき」(四月、祭の頃)をあげるまでもなく、春の霞と秋の霧は、雲とともに「立ち隔つる」ものである。氣象面で言えば、三者ともに水滴のもたらす異なった現象であり、霞は空や遠景がぼんやりする現象で、遠くかすかなものであり、一方霧は、地表近くの大氣中に煙のようになっていいる現象で、目の前に深く立ちこめる。雲の場合は、空中に浮遊し、遠く空をおおう。即ち、霞は遠くに薄く、霧は近くに深く、雲は高くに厚く「立ち隔つる」ものである。しかし、遠い山の中腹にたなびいている薄雲を霞というが、その中に入ってしまうば霧であり、これらを厳密に弁別することは必ずしも容易ではない。また、現在の氣象学では、視程一キロメートル以遠のものを霧といい、霧の薄いものを霞とし、霞は氣象用語にはない。が、大和盆地、山城盆地で四方の山々が水蒸気にはやけ、少し遠くから見ると姿を隠してしまう地形の中で、春霞趣味を形作り、それに対応する秋の川霧の情趣を培ってきた古えの人々にとっては、自然が失われつつある現代ではなかなか感得し難い前記のような微妙な差異を体感し得ていたであろうことは十分に想像され、そうした空間意識がそのままの形で、あるいは

心象の形をとって和歌に表現されることもまた容易に推察されるところである。

そこで以下、この「立ち隔つる」霞と霧の実態の微妙な差異が写實的に平安朝の和歌の表現として映し出されていることを確かめ、さらにそれが心象風景として、源氏物語の和歌に深く関わっていることを、同じように「立ち隔つる」雲を加えて論じてみたいと思う。(注)

—

和歌初学抄(藤原清輔 仁安年間(1166~1169)以前成立)は、各々の歌材に縁のある用語をほぼ網羅するが、その中の霞、霧、雲について一覽表にすると左のようになる。

縁語													歌材			
フル	ヤク	ツム	ホノカナリ	オボツカナシ	ナガル	カクス	コム	タナビク	ソビク	カゝル	シク	ハレズ	ハル	ヘダツ	タツ	霞
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	霧
○							○					○	○	○	○	雲

縁語										歌材	
タチノボル	トブ	カサナル	ヤヘ	ワカル	ワタル	タユタフ	カヘル	キル			霞
											霧
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	雲

これらを見ると、各々の歌材の詠まれ方がわかるわけであるが、以下、他の歌学書や歌例などを合わせて考えてみたい。

まず、タツ、ヘタツが三者に共通することは言うまでもない（ハルについては後述する）。

次に、霞と雲とに共通する語をみると、シク、カゝル、ソビク、タナビクである。シクは、「かすみしく春のしほぢをみわたせばみどりわくをおきつしら波」（千載春上8撰政前石大臣）「くもしきてふるはるさめはわかねども秋のかきねはおのがいろいろ」（続古今釈教阿慈寛大師）のように、遠くまで、一面に広がることを意味し、カゝルは、「おもへども猶うとまれぬ春霞かからぬ山もあらじとおもへば」（古今雑体1032）「いづくとも所定めぬ白雲のかからぬ山はあらじとぞ思ふ」（拾遺雑恋1217）のように、高く遠くにあるものにおおいかぶさる意をもつ。またタナビクは、「春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく」（古今春下69）「白雲のたえずたなびく岑にだにすめばすみぬる世にこそ有りけれ」（古今雑下95）これたかのみこ）の如く、山のように高く遠い場所に横に立ち広がることを意味し、ソビクは、「聳、ソビク、タナビク」（名義抄）とあり、タナビクと類似した意をもつ語である。これらの四語はいずれも遠い、あるいは高い状態を表わすもので、これらの語の用いられない霧は、逆に近い、あるいは低い状態にあることを示すものと考えられる。^(注3)

次に、霧と雲との共通する用語には、ハル（ハレズ）がある。初学抄では霞にもあけるが、源氏物語以前に限れば三例のみであり、ハルは霧と雲の例が圧倒的に多い。両者は流れ動くものであり、そ

の結果、消え去る、ハルの状態を導き出すことになる。対して、霞は静止しており、風などの外からの力がなくては消失しないのである。また、初学抄にはないが、霧と雲とに共通する用語にアナタがある。「さほがはのきりのあなたになくちどりこゑはへだてぬものにぞありける」（後拾遺冬388堀川石大臣）「冬ながらそらより花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ」（古今冬330きよはらのふかやぶ）のように用いられるが、アナタは厚く隔てられて全く見えないう向う側を意味しており、薄くかすかに隔てる霞に用いられないのは納得されることである。

次に、霞と霧とに共通する縁語としてコムがあげられる。「山ざとの家は霞こめたれどかきねの柳すゑはとに見ゆ」（拾遺雑春1031弓削嘉三）「いとどしくもおもふやどをきりこめてながむるそらも見えぬけさかな」（新勅撰秋上弼藤原道信朝臣）のように用いられ、あたりをおおっているのは、家ゑ、やどという低い視座にとらえられるものである。また、初学抄にはあげられないが、両者はフカシを共有し、「たごの浦に霞のふかく見ゆるかなもしほのけぶりたちやそふらん」（拾遺雑春1018よしのぶ）「霧ふかき秋の野中のわすれ水たえまがちなるころにもあるかな」（新古今恋三121坂上是則）のように用いられるが、この語は、空間的に上下の方向について「高し」の対にあるもので、たごの浦、秋の野のように低い視座にとらえられるものについて詠まれている。コム、フカシともに低い視座にある語であり、高い視座でとらえられる雲とは相対することになり、同じように遠景である霞も、この高低という縦の視座によって雲とは一線を画すことになる。

続いて、三語各々に独自の縁語についてみると、霞は、カクス、

ナガル、オボツカナシ、ホノカナリ、ツムム、ヤクとあり、うち、オボツカナシ、ホノカナリは、文字通り霞のかすかな隔てを表わしており、ナガルは、「春霞流共尔青柳之枝啄待而鶯鳴毛」(万葉卷十春雜1825)のように、シクに近い、遠い広がりの意味し、ツムムは「カコイマワス」(日葡辞書)とあるように、カナルに近い語で、やはり遠い視座をもつものと考えられる。^(注6)

霧独自の縁語にはフルがあり、近景であることを表わしている。他に、マガキとともに、「山ざとにきりの籬のへだてずはをちかた人のそでもみてまし」(新古今秋下御曾弥好忠)のように詠まれて、近く厚い隔てを表わしている。

雲には、キル、カヘル、タユタフ、ワタル、ワカル、ヤへ、カサナル、トブ、タチノボルという独自の縁語があげられるが、大方に高い位置にあることを示すものである。雲は他にヨソとともに、「あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから」(古今恋五羽きのありつねがむすめ)のように詠まれ、アナタに近い、遠く厚い懸隔を示すものである。

以上より、霞は遠くかすかに、霧は近くに深く、雲は高く遠くに厚く立ち隔てるといふ実態が、和歌の表現に相当写實的に映し出されているという事実を確認し得たように思う。

ところで、ここで大和絵について少しく触れておきたい。周知の通り、雲霞は大和絵の画材として多く見られ、文献上でも屏風絵・屏風歌等に多々看取できる。^(注7)が、霧はというと、大和絵にはまず見出せないように思う。文献上でも、屏風歌に霧を詠む場合の多くは歌詞のみであり、詞書から霧の絵柄があったと判断されるものは、「九月きり山をこめたり」(貫之集10)「さほ山、もみぢあり、きり

たてり」(忠見集10)「きりたちて、もみぢのきどもかくせるところ」(同56)「そらの霧のなかに雁なきて渡る」(順集292A)「むさしの、きりたちたり」(能宣集408)が管見の全てである。これらはいずれも山あるいは野に立つ霧で遠景のものであり、あるいは雲霞と同趣の絵柄をもって見立てたものとも考えられようか。近くに立ちぶさがる霧は絵柄としてはなじまないものであったものと思われる。また、霧が流れ動くものであることも、静止した大和絵の画材として切り取り難いものであったとも想像される。いずれにせよ、和歌において自然を描写する場合に、大和絵と無関係であったとは考えられないが、その大和絵も自然そのものと乖離してはいないということであろう。

二

ところで、上代においては、春||霞、秋||霧の図式が必ずしも固定したのではない。「秋田之穂上尔霧相朝霞何時辺乃方二我亦将息」(万葉卷二 相聞88)は秋の霞を詠み、「春山霧惑在鶯我益物念哉」(同卷十春雜1896)は春の霧を詠んでいる。また、夏の霧を詠んだ、「日霧八重山越而霍公鳥字能花辺柄鳴越来」(同卷十夏雜1949)の例もある。

平安時代になると、春霞、秋霧が固定する。拾遺集巻頭歌にみられるように、霞は春を告げくる風景として認識され、それに対応して霧も秋の景物として定着する。^(注8)この春は霞、秋は霧という認識が定着するにともなって、霞と霧を詠む平安朝和歌に一つの拘束が与えられることになる。即ち、前述のように、霞が遠くに薄くかかり、

霧が近くに深く立ちこめるといふ実態は、必ずしも春と秋に特有のものではなく、実態をそのまま表現することの不都合な場合も生じてくることになる。そのために、「やまざくらかすみへだててはのかにも見しばかりにや恋しかるらん」(貫之集58)と「秋ぎりはたちかくせどもあしひきの山のにしきはまだに見えけり」(元真集10)のように、前者の遠くかすかに隔てる霞の実態が後者では霧のそれに見立てられ、必要の範囲で季節に合わせた言い換えがなされており、それは前記の霧の屏風絵の場合と同趣のものであろう。日常の詠歌の場合、それは必至のものであると考えられる。しかし、フィクションの世界においては、おのずと事情は異なってくる。この霞と霧の属性を心象をも含めて徹底させることは虚構の世界では必ずしも難かしくはない。そこで、このことを、源氏物語という文学作品の読みの問題として、以下考察してみたいと思う。

三

はじめに霞について考えてみたい。

(一) うちかへりみたまへるに、来し方の山は霞遙かにて、まことに
三十里の外の心地するに……

源氏 ふる里を峰の霞はへだつれどながむる空はおなじ雲るか

(須磨179)
(注10)

須磨に退去した源氏のかえりみる都との間を霞が隔てる。その霞は都まで遙かに遠く広がっているが、都と同じ空まではおおいきれない浅い隔てであり、それが源氏にとってはわずかな慰めとなつて

いる。

(二) 院 九重をかすみ隔つるすみかにも春とつげくるうぐひすの声

(少女66)

朱雀院行幸の折の遊宴において、春鶯囀にちなんで詠んだ院の歌であるが、退位して九重から霞の洞へと、折からの春霞を間に遠く隔たつたことを嘆くが、その隔ては、帝と源氏の来訪によって容易に取り除かれる程のものである。

(三) 帝 九重にかすみへだてば梅の花ただばかりもひひこじとや

(真木柱70)

鬚黒大将の力により、宮中を退出する玉鬘に對し、我が物にならなかつた無念を冷泉帝が詠んだものであるが、九重の霞の隔ては、帝のいる宮中から玉鬘が遠くにあることを意味するとともに、本来は薄い隔てであるはずの霞が、大将によって「九重に」厚く立ち隔てる様を表現している。

(四) はるばると霞みわたれる空に、……

八の宮山風にかすみ吹きとく声はあれどへだてて見ゆるをちの白

波

句宮 をちこちの汀に波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の川風

(稚本16465)

霞を句宮や薫のいる山荘と八の宮邸との間を隔てるものとして、自邸を訪ねて来ないことを嘆いた八の宮歌と、その心を慰めんとする句宮の返歌であるが、その霞ははるばると隔ててはいるものの、風が吹き解くほどの薄いもので、川波のように厚い懸隔ではない。

(五) 句宮 つてに見しやどの桜をこの春はかすみへだてず折りてかざ

さむ

中の君いづくとかたづねて折らむ墨ぞめにかすみこめたる宿のさくらを
(権本252)

(四)を受けたもので、今回は霞を隔てずに直接宿を訪ねて中の君に逢いたいと傍若無人に詠みかける匂宮と、故八の宮の服喪中で恋の相手はできないと拒絶する中の君との贈答歌であるが、その霞は、中の君の反駁にもかかわらず、匂宮の中では二人の仲を厚く隔てるものとは認識されていない。

以上が霞の隔てを心象として用いたものの全てであるが、いずれの場合も、遠くに薄く立ち隔てる霞の属性を写実的にとらえ、それが心情にまで深く立ち至った表現形態をとっていることを確かめ得たように思う。

四

次に霧について検討してみたい。

(一) あさぼらけ霧立つそらのまよひにも行き過ぎがたき妹が門かな
立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは草のとざしにさはりしもせ
じ
(若紫21)

源氏が北山からの帰途、忍び所の門をたたかせた折の、夫々の仕人が主人に代わって詠みかわした贈答歌であるが、霧は、源氏の来訪に門をあげようとしなない女の固く閉ざした心を表わしており、近くにありながらも厚く堅い隔て心を象徴するものとなっている。

(二) 藤壺 こののへに霧やへだつる雲の上の月をはるかに思ひやるかな
な

源氏 月かげは見し世の秋にかはらぬをへだつる霧のつらくもあ

るかな

桐壺帝亡き後、源氏が藤壺を訪ねた折の兩人の贈答歌で、同じ宮中に身近にいなながら、霧(右大臣方)の妨げによって、月(朱雀帝)に会って話しが出来ないことを嘆く藤壺に対して、表面はその意を受けながら、「へだつる霧」と、身近にいなながら自分を避ける藤壺を恨んだ歌を源氏は返している。この場合も、霧は近くにはあるが厚い隔ての心象として表現されている。

(三) 霧いたう降りて、ただならぬ朝ぼらけに、うちながめて独りごちおはす。

源氏 行く方をながめもやらむこの秋はあふさか山を霧なへだて
そ
(賢木87)

六条御息所の伊勢下向の途に思いを馳せる源氏の独詠歌であるが、目の前に降りふたがる霧は、「なへだてそ」という願望とは逆に、御息所との永遠の厚い隔てを象徴的に表現している。

(四) 朝顔 秋はてて霧のまがきにむすばほれあるかなきかにうつる朝顔
顔
(朝顔46)

源氏の「見しをりのつゆわすられぬ朝顔の花のさかりは過ぎやしぬらん」に返した朝顔の詠歌であるが、自らを、霧(外部との間を厚く隔てるもの)に閉じられたまま衰えゆく朝顔の花になぜえず、世離れた有様にあることを詠んでいる。

(五) 霧のただこの軒のもとまで立ちわたれば、……
夕霧 山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地して
落葉宮 山がつのまがきをこめて立つ霧もこころそらなる人ほどと
めず
……

夕霧 荻原や軒ばのつゆにそぼちつ八重立つ霧を分けぞゆくべ
き (夕霧390~399)

夕霧が、未亡人になった落葉宮邸を訪れ、恋情を訴える場面の歌であるが、目の前に厚く立ちふさがる霧は、夕霧を落葉宮邸から立ち去ることを強く拒むものとして表現されており、落葉宮の心はさておき、夕霧にとっては、二人の小宇宙と外界とを堅固に隔てるものを象徴するのである。

(六) 峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに、……

蕪 「あさばらけ家路も見えずたづねこし楨の尾山は霧こめて
けり

心細くもはべるかな」……

大君 雲のゐる峰のかけ路を秋霧のいとど隔つるころにもあるか
な (橋姫140)

「峰の八重雲思ひやる隔て」は、「思ひやる心ばかりはさはらじを何へだつらん峰の白雲」(後撰離別羈旅1306橋直幹)、「しらくものやへにかさなるをちにてもおもはむ人に心へだつな」(古今離別390つらゆき)等により、周囲から厚く隔てられた心の様を象徴したものと解釈され、八の宮の仏道修行の場を表わす「雲のゐる峰のかけ路」も同趣のものである。そのような雲の遠く遙かな強い隔てに加えて、今は目の前に霧が濃く立ちふさがって、「いとど隔つる」頃なのである。

(七) 大君 なみだのみ霧りふたがれる山里はまがきにしかぞもろ声に
なく

匂宮 朝霧に友まどはせる鹿の音をおほかたにやはあはれとも聞
く (椎本185186)

霧は、亡き父八の宮を慕って涙にくれる姉妹の、周囲を厚く閉ざした心をかたどっている。

(八) 匂宮 女郎花さけるおほ野をふせぎつつ心せばくやしめを結ふら
む

蕪 霧深きあしたの原の女郎花ころをよせて見る人ぞみる
(総角50)

姉妹を中にした二人の男の恋のさやあてであるが、女郎花が姉妹に擬せられ、霧が、匂宮歌のしめなわのように厚く外界を隔てるものをかたどっている。

以上が霧の隔ての心象風景として表現されたものの全てであるが、近くに厚く立ち隔てるという霧の実態が、そのまま人物の心情に深く関わって表現されている事情を確かめ得たように思う。

五

最後に雲について触れておきたい。

(一) 源氏 なきかげやいかが見るらむよそへつつながむる月も雲がく
れぬる (須磨174)

故父桐壺帝にならずらえて見ている月が雲に隠れてしまった哀感を詠んでおり、雲が月＝父を源氏から高く遠くに強く隔ててしまった後の孤独の思いが吐露されている。

(二) 心から常世をすててなく雁をくものよそにもおもひけるかな
(須磨193)

源氏のともをして須磨に至った惟光が、自分も旅に出てみてはじめて世離れた所に住む雁と同じ境遇であることを知った感慨を詠ん

でいるが、「くものよそ」は、雲のかなたのよそ事、高く遠くのかなたにある雲が堅固に隔てているあちら側の事として雁を見ていた心をかたどっている。

(三) 源氏 たなばたの逢ふ瀬は雲のよそに見てわかれにはに露ぞおきそふ (幻姫29)

出家の準備を急ぐ源氏には、七夕の逢瀬も自分とは全く無関係の、雲のかなたのよそ事なのである。

(四) 冷泉院世をいとふ心は山にかよへども八重たつ雲を君やへだつる (橋姫22)

冷泉帝が山に住む八の宮に贈ったものであるが、八重雲隔つる山とは、前出(霧の項六)と同じく、越えがたい懸隔を表わしており、八の宮の仏道修行の場合は、世俗との間に高く遠く強い隔てのある離俗の世界である。

以上が心象としての雲の隔ての例の全てであるが、いずれも極めて強い懸隔を表わしており、それは離俗にも至るものである。

六

源氏物語が、霞、霧、雲の夫々の自然の実態を、心象風景として写實的に映し出していることを確認したわけであるが、当然、春霞、秋霧の定着による表現の難しさがあったものと思われる。その場合は、同じく「隔つるもの」である衣や波などを用いたものと考えられる。前出の霞の項(四)の場合は、霞の遠くかすかな隔てに對置させて、強い隔てには宇治の川波を用いている。また、あるいは心象を主として、それに対応するよう季節を選び取った場合もあるように

思う。上坂氏の御指摘のように、夕霧卷一卷は霧が主題であるといえるほどに重い存在感をもっているが、その霧の強い閉塞性を表現せんがために、あえて季節を秋に設定したとも考えられるように思う。源氏物語は卷々の中で季節がゆるやかに移っており、少し間遠な形で季節を設定することはさほど難しいものではなかったはずである。霞の項(一)の須磨卷の場合も、故郷をかえりみる源氏には、霧のように目の前に強く隔てるのではなく、都を遠く隔てる霞でなければならず、また、霞のかすかな隔てでなくては救がない。

以上をまとめると、「立ち隔つる」霞、霧、雲が和歌に詠まれる場合、必ずしも和歌的自然ではなく、多くは自然の実態をありのままに映し出しているが、春霞、秋霧の固定が実態を離れた季節による言い換えを、日常の和歌については必要の範囲で要求することになる。が、フィクションである源氏物語においては、その限りではなく、それらの実態が正確に写實的に表現され、さらにそれが心象の形をとって、物語の心情描写の深い部分に関与している、ということになる。

注

(一) 上坂信男氏が「源氏物語——その心象序説——」の中で、霧と雲の心象について論じておられる。本稿はこれを踏まえつつ、霞を加えて「立ち隔つる」ことに焦点を合わせて考察する。

(二) 和歌の本文は新編国歌大観に拠る。以下同。

(三) 「秋霧のたなびくをの山路にはことのさへぞ深く成りける」(公任集御)と、霧とタナヒクを合わせて詠んだ歌が、源氏物語以前に一例みえ

る。

- (4) 「さきさかずつげよよしの山桜かすみはれなばよそにてもみむ」(元
貞集82)「しがらきのみねたちこゆる春霞はれずも物をおもふころかな」
(古今和歌六帖608)「かすみはれみどりのそらものどけてあるかなさか
にあそふいとゆふ」(和漢朗詠集46)
- (5) 「秋ざりのはる時なき心にはたちのそらもおもほえなくに」(古今
恋二80凡河内みつね)「あしひきの山べにをれば白雲のいかにせよとかは
るる時なき」(古今物名類つらゆき)等。
- (6) 残るカクスは、霧や雲にも用いられており、ヤクは、朝やけ、夕やけを
意味し、本稿で問題にしている霞とは異なる。
- (7) 「御屏風に、春よしの山にかすみたてり かすみたつよしののやまをこ
えくればふもとぞはるのとまりなりける」(出見集1)「屏風に はるば
ると雲井をさして行く舟の行末とほくおもほゆるかな」(拾遺雜賈1160伊
勢)等。
- (8) 「はるたつといふばかりにや三吉野の山もかすみてけさは見ゆらん」
(王生忠岑)「春霞たてるを見れば荒玉の年は山よりこゆるなりけり」
(紀文幹)「昨日こそ年はくれしか春霞かすがの山にはやたちけり」
(山辺赤人)「吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはらん」
(源重之)
- (9) 「ちりぬべき山の紅葉を秋霧のやすくもみせず立ちかくすらん」(貫之
集166)「秋霧をわけゆくかりは何なれやおくれてのちにまどふけふかな」
(順集29)等。
- (10) 源氏物語の本文は、日本古典文学全集に拠る。巻名、頁数を付した。以
下同。